

トレーサビリティ中国四国地域セミナー（岡山）

日時：平成16年12月3日（金）13時～

場所：岡山コンベンションセンター1Fイベントホール

基調報告

財団法人 えひめ地域政策研究センター研究員 清水和繁氏

「信頼の”手と手”をつくる架け橋構築 - えひめみかんのトレーサビリティ - 」

えひめ地域政策研究センターの清水でございます。

今年の4月1日に愛媛県農業協同組合連合会と全農が合併をいたしまして、全農の愛媛県本部になりました。その時点で愛媛県のシンクタンクに出向して、ご紹介いただきましたように、ここで色々な地域づくりの活動をしております。

今日は、平成14年の9月に全国に先駆けて実施し、実験ベースではなくて事業ベースでトレーサビリティの事業化をはかった話をしたいと思っております。トレーサビリティはあくまでも生産などの履歴を遡及するものですが、私はトレーサビリティというよりは、セキュリティプログラムを構築しようと思いたちました。セキュリティ、これは生産者を守り、消費者を守り、その架け橋となるような手と手を結ぶ、そういった新しい関係をどう構築していくかというような事を考えました。トレーサビリティというと、コンピューターシステムありきという風潮がありますが、今日はセキュリティプログラムの考え方を通して、青果物流通の新たな仕組みづくりの参考にしていただけたらと思います。

さて、トレーサビリティを問い直すという事で、まずいくつか申し上げたいと思います。

皆さん、安全や安心を容易に使い過ぎているのではないのでしょうか？。わかって使われているのかな？。わからずにただ単に安全だ安心だと言われているのではないかと思います。「安全」というのは物理的なもので、「安心」というのは心理的なものです。これを実現もしないのに安全や安心だと言い、消費者の方も簡単に安全や安心を使い過ぎる。もう少し、安全や安心について真摯に出来るのか出来ないのかという事を考えるべきだと思います。

次に、いくらミカンや野菜の良い品種ができ、良い技術があつて、良い物が出来たとしても、仕組みが悪ければ成果は出ません。今は、そういう時代だという認識が必要で、これが現在の農産物の状況です。いままでならば、良い品種、良い技術で良い物が出来たら必ず経営効果が出る。ところが今は出ません。この現実は何なのかという事をどう考えるかが問題です。そして事業ベースでモノを考えることが必要で、経営効果が出なければ意味がありません。いくら実験的にやってもトレーサビリティが意義があると言っても、ある程度事業化ができて、きちんと採算がとれて農家の経営に役立たなければ全く意味がありません。こういったところを産業という視点で捉えなくては駄目だと常々思っています。

さらにトレーサビリティで何をやるのか、何を指すのかというのが問題です。それと作る人と食べる人に役立てる新たな仕組みが創造出来るのか。時代の流行だからというのではなく、本当にこれからの仕組みとしてどうなのか。目的と手段をとり間違えないようにしなくてははいけません。そして、「作り手よし、買い手よし、世間よし」が基本です。これは事業化の基本で、産業の基本でもあります。作る人に良かった、買って食べる人に

良かった、その仲を取り持ってもらう人に良かった、世間的も良かった。これは大阪や近江商人の基本で、そういった基準に立って、トレーサビリティを問い直してみなくてはなりません。産業として本当に役立つのかどうかということです。

私は大学の先生と違いますし、システムの方とも違う。農業の実践屋で技術屋でございませぬ。実践し事業化した経験から申し上げますと、トレーサビリティは光と影があります。

生産情報などが開示されているので安心して買える。生産者の顔が見えて、流通体系の中で消費者の手にはどう手に渡っているのかがわかる。万一、何かあった時の回収がスムーズにでき、問題点を解決できるなど、消費者にとっては大変良い仕組みだという思いませぬ。ただ生産者の立場や農業サイドに向きを変えたらどうなんでしょうか。栽培記録の記帳だけではトレーサビリティとは言いません。私共は農協組織として、栽培の記帳管理をしましょうという運動をしています。ただ、それをやっているからという事でトレーサビリティだという安易な考え方が組織内に多い。そのことを私はいつも申し上げます。

重要なことは、個人の生産情報とリンクして、個人毎の分別した出荷が前提であるということです。ミカンもそうですが農作物は、現在、大量生産・流通方式ですので、リンクして、全体でプールしています。トレーサビリティを実現しようとしたら、個人別分別出荷体系に改善しなくては駄目です。栽培方法を記帳管理しても、全部混ぜこぜで出荷してしまう。これではトレーサビリティはできません。やはり個人別分別出荷というのをどう考えていくのか、この出荷体系、出荷システムをどう考えていくのかという大きな問題があります。次に生産記録の認証をどうするかという問題があります。自分が記録しても、私もミカンを作ってますが間違っただけで記帳している場合があります。そういったところを誰が指導して、誰が正しいという認証をするのかという問題がでてきます。この認証を調べると、一件の取引で50万円くらい費用がかかるようです。一件の取引と言いましても、利益を得て50万円の利益を出すというのは大変なことです。農家に50万円を払えるのかということが問題です。客観的な認証をどうするかという事を考えていくと、認証システムや費用の問題が出てきます。

そしてトレーサビリティにはコストがかかります。

コンピューターシステムの話がありましたが、この費用は誰が払うんでしょうか？トレーサビリティのコストを、青果物1パックあたり約10円～20円位と試算してみました。1パックですよ。ミカンであれば1パックに900グラムの場合もありますし、1キロくらいの事もあります。ミカンを出荷してワンパックあたり10円～20円のコストがかかる。誰が払うんでしょう？、誰が負担するのでしょうか。聞くと産地が負担するんじゃないですかと言われました。販売店では農協が払うんでしょうと言われました。冗談じゃないですよ。農協は生産者からもらわないといけなくなる。そうしたら販売価格を高く設定せざるを得ませぬ。2割も3割も割高になる。買う人は安い方がいいですよ。 ”トレーサビリティだから購入する価格が高い”、”とんでもない”と誰もが言うのではないのでしょうか。販売サイドは変わらず、販売単価は高くなり、このコストを誰が払うのかというのが明らかにされていない。それを抜きにして、システムだ、トレーサビリティだといわれる始末。生産者の負担が多くなってしまいうんじゃないですか。これをどうするのか。実は、こういったところを一生懸命取り組んでいます。

さて、私どものセキュリティプログラムはなぜ出来たのか。これは動機が違います。私

が目指しているセキュリティプログラムは、曇りガラスの向こうが見える仕組みづくりです。その原点は、平成13年産のミカンです。平成13年産のミカンがどうなったのか、あの年に初めてリンゴとミカンに国の経営安定対策が実施されました。需要に見合った生産・供給をしようと、ミカン山に真っ黄色になるまでミカンを捨て需給調整をしました。それは痛々しいですよ。生産者は自分が作ったミカンを捨てるんですからね。需給調整とはそんなものです。その年は干ばつで、かつマルチ栽培が普及したので、美味しいミカンが出来ました。美味しいミカンが出来て、生産調整の結果、目標としている需要と供給のバランスがとれる状態になりました。その結末が大暴落です。どうしてなのでしょう。生産者は「何故なんや？」の大合唱でした。

実は、私どもはインターネットでのB to B取引を目指して仕組みを研究していました。B to Bというインターネット取引は、どうもまだ日本の状況には早いか、合わないのではないかという事がわかってきて、じゃあ何をしたらいいのかということを探して、ついにトレーサビリティに行き当たりました。さて、実際にトレーサビリティをやろうと言ったら、生産者がどう言ったと思います？。「何でそんなもんやらなあかんの？」「面倒くさいし、手間かかる」「何で、、、」。そこで議論をしました。「じゃあ何の為にやるか、はっきりしよう」、それが平成14年の夏でした。その時に生産者の方と議論したことは、平成13年度産ミカンで、我々が何を感じたか総括しようと。その結果、流通過程が不透明である、自分が作ったミカンが店頭に並ぶのに誰がどうやってどうなったのか全然生産者サイドにわからない。まして消費者にわかるはずがない。全く不透明である。次に価格形成に対する不信があります。消費者の方からNHKのテレビをみて言われました。「生産者の方が、ミカン山に真っ黄色にして捨てられて、もう生活が出来ないと泣いておられる。でも私達が買うミカンはどうして高いんでしょう？」と。価格形成に対する不信感がものすごく高まった。このことは生産者ばかりではないんです。生産者は本当に真摯にミカンを作り、農作物を作っています。やはり問題は、その間なんです。自分が出荷した後のことが全然わからない。どうやって価格が決まっているかわからない。どうなっているかわからない。これを私は“曇りガラス”と言っています。別に歌の文句ではありません。だから農業経営が先行き不安で、こんなミカン作りはやめたい。そういう状況になっています。

一方、消費者の方はどうなのかというと。その時は、無登録農薬の問題でわんさか報道があった年で、消費者の方も農産物に対する不信感が出ました。誰が、どこで、どういう方法で作られた物かわからないという不安感や不信感。自分が食べているものが、誰が、どこで、どんな方法で作ったかわからない。生産者も自分の手元にないからわからない。全く曇りガラスです。この曇りガラスの向こうが見える双方向の仕組みを作ろうというのが、私どもの愛媛型トレーサビリティであるし、それを発展させた仕組みが、フルーツセキュリティプログラムです。

では、どのような事を行ったのかという事でございますが、一つは機能重視の透明な価格モデルの実現です。よし、透明な事をやろうじゃないか。機能重視の透明な価格モデルを作ろうじゃないかという事で、取引全部をどこでどういうようになっているか、どこでどういう価格形成になっているか、全部一覧表にして生産者と販売店の双方に見せました。生産者はビックリしましたね。生まれて初めて見た！。きっと、スーパーがどのくら

い手数料を取って、中間経費がどうなっているか、全然知らない。私も実はその当時果樹生産技術課長でしたが、知りませんでした。技術者の立場で初めてだったからこそ新たな視点でこういった事が出来たのかもわかりません。スーパーなどの販売店もビックリしました。「生産サイドはこうなっていたんですか」と。ですから、このあとの話合いが進み、互いが話し合い歩み寄り、あとはセキュリティプログラムで安心の構築をどうするかということになりました。ということになると、目標は作り手と買い手・食べ手の直接提携と話合いで、双方の新たな連携を模索しました。これがセキュリティプログラムです。その中のシステムが、愛媛型トレーサビリティシステムであるというように考えていただいて結構です。だから消費者の方には、食べていただくために美味しく安心して食べられる新鮮な果実の提供を。生産者の方には再生産可能な生産原価を確保できるように。ミカンだったら、最低150円以上は必要ですね。それが確保できる。しかも年次変動のない安定した生産原価が可能となりました。今年は高いが来年は安いというのではなくて、年々安定した経営が出来るような生産原価を確保することがとても必要です。

さらに定量定価に基づいた安心経営。この定量定価に基づいた安心経営とは、出荷してみないとわからない、お金が入ってきて初めてわかるというのでは困る。当初の話合いと仕組みがしっかりとできていますから、こういったものを出荷したら、いつ、いくらお金が入ってくるかわかる。これを定量定価の取引といいます。こういういことに取り組んでいます。私どもの現場の経験を活かして、生産者と自ら編み出した。それが「えひめフルーツセキュリティプログラム」です。要するにそういうセキュリティを守る、保証する手順であるということです。ここで、サプライチェーンマネジメントが必要だと痛感しました。現状の仕組みはどうなっているかと言うと、生産者は農協へ、農協は県連へ、お互いに卸売市場に出して販売店から消費者にという経路になります。これを化学用語では鎖状結合と言います。縦に幾段階を得て情報が伝わるから、販売現場の情報や生産者の声が正確に伝わりにくく遅い。まさに伝言ゲーム状態ですよ。何人が並んでいて、こちらで富士山というと最後には琵琶湖と伝わる。現状はこれなんです。幾段階も間が介在する。いくら良いコンピューターのシステムがあっても、人間が介在しているから必ず間違いがあり、いくらでもごまかしがきくんです。それを直鎖状から円状、円卓状の関係にする。チェーン化、シクロ結合、ベンゼン結合です。農協も生産者も、産地コーディネーターというのは県連のことを指してますが、販売現場で窓口である消費地コーディネーターの方も販売店も、皆が同席する円卓で情報交換し、円卓状で話し合いをする。できるだけ生産者と直接販売店が話し合い取り決めをする。そのためには意識と情報の共有化が必要です。そうした意識を啓蒙し仕組みをつくり、これを実現する。これが出来さえすれば、もう何でも出来ると思うんです。これがなかなか難しい。これを目指して作ったのがセキュリティプログラムで、これはその為の意識改革の手段でもあります。